

総合病院の図書館における歯科医学書について

宇佐美雄司

I. はじめに

今回、刈谷豊田総合病院（以下、本院）の図書委員長の任にあるという理由だけで、研修会の貴重な時間とこの大切な誌面をいただき光栄に思います。さて、昨今、日本中の病院は日本医療機能評価機構による病院機能評価の認証を受けることが、重要視あるいは当然視されています。本院は1998年に認証され、その後、今までに2回の更新審査を受けていますが、200余りの審査項目の中で図書室は高い評価を受けてきました。今回の講演ではその経験と実績を自慢げにお話しする予定でしたので、まず下調べとして近畿病院図書室協議会（以下、本協議会）加入病院の状況を、各病院のホームページを開いて調べてみました。その結果、本協議会加入病院のなんと6割が病院機能評価の認証取得をしていることがわかりました。日本医療機能評価機構のホームページによると認証取得している病院は全国で約3割ですから（2008年10月現在）、かなり優秀です。したがって、これでは到底、本院の自慢話だけでは場が持たないことを悟った次第です。思案した末、自分の専門分野から話題を提供することにしました。実はホームページを調べた際に、歯科、歯科口腔外科が意外と多くの本協議会加入病院に開設されていることがわかり少し驚きました。そこで日々、病院図書館の管理を担っている皆さんに少しでもお役に立てるようにと、歯科医学書について考察してみました。ただし、内容の構成は小生の

独断と偏見が人工調味料のように添加されていることをご容赦ください。では、本題に。

II. 歯科医学分野と歯科医療

まず共通の理解のために日本の歯科医学教育および歯科医療について少し解説します。歯科医療を担う者すなわち歯科医療従事者の構成は歯科医師、歯科衛生士、歯科技工士です。これらの職種はすべて国家資格ですが、歯科医師が全ての歯科医療の責任と権限を有し、歯科衛生士は歯科診療の介助や口腔衛生指導など行い、歯科技工士は義歯などを製作する歯科治療の重要な裏方です（余談ですが、歯科医院に勤務している、いわゆる歯科助手は無資格であり正規の歯科医療従事者ではありません）。歯学部を卒業し歯科医師国家試験に合格すると一応「歯科医師」ですが、現在は卒後臨床研修施設（大学病院、総合病院の歯科、大きな歯科医院など）での研修が必須です。この研修を終えると多くの歯科医師は歯科医院などの勤務経験を経て、歯科医院を開業します。いわゆる「一般の歯科医師」です。卒後臨床研修後にも病院に勤務している歯科医師は全体の3%未満です。しかもその大部分は歯学部付属病院に勤務していますので、私のように総合病院の歯科領域部門に勤務している者はレア物です（例えば、私の同級生には大学教授が5人もいますが、病院勤務医は私を含め2人のみで、残り50人余りが開業医です）。

さて、歯科医学書を歯科医療にかかわる専門書籍全てとするならば、歯科医師のみならず歯科衛生士、歯科技工士の教育、養成、職務にか

かわる書籍すべてとなりますが、実際には歯科医師の職務や専門分野にかかわるものを歯科医学書と考えます。しかるに歯学部 of 講座 (専門課程) の種類が歯科医学書の分野を反映しているものと判断します。現在、日本には歯学部が29校ありますが、大学により講座の名称に少々違いがあります。さらに近年、大学院大学となった大学では、本来の専門分野が名称からはわかりづらい講座 (そのため、今でも旧講座名を併記しています) もありますので、実例として私の母校での名称で説明します (表1)。

表1 歯学部の講座の例 (筆者の母校)

基礎講座	臨床講座
口腔解剖学*	予防歯科学
口腔病理学	歯科保存学
口腔生理学	口腔治療学
生化学	口腔外科学*
口腔細菌学	歯科補綴学*
歯科薬物学	歯科矯正学
歯科理工学	小児歯科学
	歯科放射線学
	歯科麻酔学

(*第一と第二がある)

まず、歯学部の講座 (科目) も医学部と同様に基礎系と臨床系に大別されますが、基礎系には「口腔解剖学」「口腔生理学」「口腔病理学」などがあり、これらはいわゆる基礎医学分野の「口腔」に特化したものです。歯学部特有のものとしては「歯科理工学」という分野がありますが、この学問は歯の治療材料や歯科治療機器について研究するものです (そのためか、口腔理工学とはいいません)。

臨床系には「歯科保存学」「歯科補綴学」「歯科矯正学」などがありますが、一般の人にはわかりにくい名称ですね (もちろん、私も歯学部の専門課程に上がるまで知りませんでした)。「歯科保存学」とは端的に言えば、軽症から中等症程度のう蝕を治療する学問であり、樹脂や金属などの歯科材料を充填し歯を修復します。主に歯髄が保存された状態で治療しますから保存学です。「歯科補綴学」とは歯の実質欠損 (歯の喪失も含む) を人工材料で補い、機能回復させ

るためのものです。具体的にはクラウン (歯に被せる主に金属製の冠)、ブリッジや床義歯 (入れ歯のこと) のための学問です。「歯科矯正学」はご存知と思いますが、歯をゆっくり動かして歯並びを治します。これらは日本十進分類法にも順番は違いますが、相当するものがあります。ちなみに米国国立医学図書館分類法 (NLMC) では「Operative Dentistry」「Prosthodontics」「Orthodontics」として分類されています。う蝕と双壁をなす歯科疾患である歯周疾患 (歯周病ともいいます) は誰もが知っている病名ですが、私の母校では「口腔治療学講座」が担当していました。大学によっては「歯周病学講座」と称している大学もあります。学問的には現在は「歯周病学」と称されていますが、では図書館の分類はどのようになっているのでしょうか。日本十進分類法9版では「歯周病学」はなく、疾患名である「497.26 歯周疾患：歯槽膿漏症」が該当します。米国国立医学図書館分類法でさえも、他の治療の分野が前述したように独立して分類されているにもかかわらず、「歯周病学」に相当する「Periodontology」ではなく、疾患名の「歯周炎 (Periodontitis)」となっているのは少し意外でした。

「口腔外科」は今や周知されていると思いますが、「口腔外科学」としての授業内容は、歯および歯周組織から由来する炎症 (顎顔面部の蜂窩織炎や顎炎)、顎顔面部の外傷 (歯の脱臼から顎骨骨折まで)、口腔内や関連臓器に発生した良性や悪性の腫瘍 (つまり癌)、そして口腔領域の先天異常 (例えば口唇裂や口蓋裂) までの広範囲です。「外科」とつきますが、顎関節疾患、口腔粘膜病変や味覚異常など保存的治療が主体の疾患も「口腔外科学」の領域とされています。言い換えれば、う蝕や歯周病以外の口腔領域の疾患全てが対象と成り得ます。ちなみに日本十進分類法では「497.3 歯科外科学、口腔外科」、NLMCでは「Oral Surgery」となり明解ですが、少なくとも私は「歯科外科学」という呼称を耳にしたことはありません。

Ⅲ. 病院の歯科部門と口腔外科学

歯科領域における正式な標榜科名は「歯科」「小児歯科」「矯正歯科」そして「歯科口腔外科」です。本院のような総合病院に開設されている歯科部門の大部分は「歯科口腔外科」を標榜しているはずですが、学問的名称は前述したように「口腔外科学」であって「歯科」はつきませんし、一つの標榜科名に「科」が二つ入っているのは奇異に思います。このような標榜科名になったいきさつについてはここでは触れませんが、かなりの紆余曲折があつてのことです。さて、診療科としての「歯科口腔外科」は、通常の歯科治療対象外の口腔疾患の診療ということになります。歯科医院でも「歯科口腔外科」を標榜していることもありますが、総合病院などに開設された「歯科口腔外科」は口腔領域の二次医療機関と同義であり、口腔外科疾患の治療のため、当然入院治療も行います。本記事における病院の歯科部門とは、基本的にはこのような歯科口腔外科を想定しています。もちろん、病院によっては限定した分野、例えば障害者の歯科治療や、口唇口蓋裂などの治療に特色を有した歯科部門かもしれません。そのような場合には、求められる書籍も異なりますが、誌面の都合もありますので、あくまで一般的な総合病院の歯科、歯科口腔外科を対象にして話を進めます。

Ⅳ. 歯科医学書の成書と雑誌

1. 和書

歯科医学書を成書といわゆる雑誌に大別して考えてみます。歯科医学書においても成書には「口腔生理学」や「歯科保存学」「最新口腔外科学」など、ほとんど前述した科目名がそのまま書籍名になっているものがあります。これらは大学教育における教科書としての役割を意識して編集されていることもあり、各大学に縁のある先生（いわゆる同じ学閥の先生）が執筆していることが少なくありません。各科目の内容を系統立てたものですから、均一な（一般に認知された）歯科医学知識の吸収には不可欠でしよ

う。しかしながら、（たぶん分厚い書籍ほど）監修などに時間を費やすので、必ずしも最新の内容ではないことがあり、また全般的に網羅するためかえって実際の臨床の現場で応用できないなどの欠点もあります。そのため、テーマ（治療法や特定の疾患など）を限定した成書（あるいは雑誌の特集号）があります。例としては「……抜歯術」とか「口腔粘膜疾患……」などという名前の本がそうです。むしろ、これらのほうが卒後臨床研修や診療サイドで活用できるかもしれません。

歯科領域に限らず医学雑誌は出版社が発行しているものと各学会が発刊しているものを区別する必要があります。ご存知のように前者は通常「商業誌」といい、出版社の編集方針により発行されているものですが、2008年現在出版されている歯科関係の商業誌を表2に示しました。これらは投稿された臨床に関する記事も掲載されていますが、多くは雑誌編集者により依頼された原稿から構成されています。内容的には診療に関することから歯科医院の経営など歯科全般に及びますが、読者としては多数派である一般の歯科医師を想定しています。

表2 本邦で出版されている歯科関係の商業誌

歯界展望（医歯薬出版）
日本歯科評論（ヒョーロン・パブリシャーズ）
デンタル・ダイヤモンド（デンタルダイヤモンド社）
ザ・クインテッセンス（クインテッセンス出版）
補綴臨床（医歯薬出版）
Quintessence Dental Implantology （クインテッセンス出版）
Quintessence Dental Technology （クインテッセンス出版）
Periodontics & Restorative Dentistry （クインテッセンス出版）
歯科臨床研究（クインテッセンス出版）
補綴臨床（医歯薬出版）
nico（クインテッセンス出版）
デンタルハイジーン（医歯薬出版）
歯科衛生士（クインテッセンス出版）
歯科技工（医歯薬出版）

さて、各学会が発刊しているいわゆる「学会誌」は、学会の編集委員会にて査読され、学術的に採用が妥当と判定された論文や、あるいは

学会から依頼された総説などが掲載されています。通常、雑誌代は学会の年会費に含まれ、会員には送付されてきます。学術雑誌と称する場合にはこちらを意味していると私は理解しています。論文としての業績的価値がある（評価される）のもこちらだけですが、学会自体が玉石混交であり権威の程度もさまざまです。そこで（またもや脱線しますが）、あらためて学会とは何か、確認しておく必要があるかもしれません。意外ですが「学会」と名乗る基準はないようです。学問を扱う組織、団体という概念からは、「日本学術会議協力学術研究団体」として登録されているものとするのが妥当でしょう。しかし、日本学術会議のホームページに出ている学会は極めて多数であり、しかも名称のみでは分野（内容）の識別も困難です。そこで医療に関係する学会の権威の目安として、日本医学会分科会もしくは日本歯科医学会分科会に属しているかどうかがあります。すると、いっきに対象は限定されます。まず日本医学会分科会として口腔領域の学会は「日本口腔科学会」だけです。日本歯科医学会分科会は表3に示した通りですが、専門分野の違いを考慮しても、私はほとんど聞いたこともない学会もあります。また、「学会」

ではなく「……研究会」という名称でも、学問的レベルが高く臨床に有意義なものもあります。ただし、研究会は専門性が高ければ逆に領域は狭くなりますし、刊行される研究会誌も抄録集程度であり、図書館で保有する必要性はほとんどないと思います。

2. 洋書

一口に「洋書」といっても、英語に限定されるでしょう。北欧においては特徴的な歯科医学が発達しているようですが、（英語でないものは世界的には評価されないため）参考にすべきものは英語で出版されています。しかし、総合病院の図書館がわざわざ一般歯科の英語の成書で本棚を飾る必要性はありません。例外的に口腔病理学などは和書の種類が少ないこと、疾患によってはWHOの診断基準や海外における疾患の概念の確認などのために、余裕があるならば所蔵する価値はあるかもしれません。私は仕事柄個人所有していますが、日々の臨床でめずらしい症例を調べるような場合には参考にしています。

世界中を見渡せば、歯科領域だけでも洋雑誌は数多く、想像もつきません。そこで代表的な雑誌として、権威の基準のようにいわれるインパクトファクター順に歯科関係の雑誌を並べてみました（表4）。インパクトファクターの付け方のアルゴリズムについては調べていませんが、要は文献として引用される頻度に基づく雑誌の格付けと解釈しています。歯科界程度ですと、研究面で活発な分野であることも条件ですが、その分野に従事している歯科医療関係者の数がインパクトファクターを大きく左右します。実際、日常の歯科診療において大きなボリュームを占める歯周病に関する雑誌が上位にあるのも、理解できることです。よって歯科領域の洋雑誌を選択するにあたり、インパクトファクターのみが決定要素になることはないと思いますが、考慮はすべきでしょう。

表3 日本歯科医学会分科会（ホームページより引用）

歯科基礎医学会 特定非営利活動法人 日本歯科保存学会 社団法人 日本補綴歯科学会 社団法人 日本口腔外科学会 有限責任中間法人 日本矯正歯科学会 日本口腔衛生学会 日本歯科理工学会 特定非営利活動法人 日本歯科放射線学会 有限責任中間法人 日本小児歯科学会 特定非営利活動法人 日本歯周病学会 有限責任中間法人 日本歯科麻酔学会 特定非営利活動法人 日本臨床口腔病理学会 日本歯科医史学会 日本歯科医療管理学会 日本歯科薬物療法学会 日本障害者歯科学会 日本老年歯科医学会 日本歯科医学教育学会 社団法人 日本口腔インプラント学会 有限責任中間法人 日本顎関節学会 日本接着歯学会
--

表4 歯科関係の洋雑誌一覧
(インパクトファクターの高い順)

Periodontology 2000
J dental research
J endodontics
Dental materials
J clinical periodontology
Oral oncology
Clinical implant dentistry and related research
International endodontic journal
Clinical oral implants research
J periodontal research
Swedish dental journal
J periodontology
European J oral sciences
Community dentistry and oral epidemiology
J dentistry
Clinical oral investigations
Oral diseases
Oral microbiology and immunology
J orofacial pain
The International J oral & maxillofacial implants
The J adhesive dentistry
J oral pathology & medicine
The J the American Dental Association
Caries research
Pediatric dentistry
Oral Surgery Oral Medicine Oral Pathology Oral Radiology and Endodontology
The International J prosthodontics
Archives of oral biology
Operative dentistry
J oral and maxillofacial surgery
American J dentistry
The International J periodontics & restorative dentistry
International J oral and maxillofacial surgery
J oral rehabilitation
American J orthodontics and dentofacial orthopedics
Acta odontologica scandinavica
Dental traumatology
The J prosthetic dentistry
Angle orthodontist
Cleft palate-craniofacial J
J cranio-maxillo-facial-surgery
Dento maxillo facial radiology
British J oral & maxillofacial surgery
J public health dentistry
International dental J
Community dental J
Quintessence international
J cranio-mandibular practice
Australian dental J

(Impact Factor Listing for journals on Dentistry, Oral Surgery & Medicine 2007 JCR Science Edition より引用)

V. 病院の図書館における選択

話が散漫になってきました。そろそろ結論を絞りましょう。各々の病院の機能や開設されている診療科（すなわち、「歯科」の有無、卒後研修指定病院かどうかなど）は考慮しつつも、病院の図書館の機能、役割からは、歯科医学書の選択は単純に考えていいと思います。まず、歯科部門が開設されていない病院ならば、口腔領域の疾患の理解、参考のために適当な口腔外科学の成書があればいいでしょう。もちろん、周産期医療や小児医療が積極的にされているような場合には小児歯科や口腔ケアの書籍の選択も有効と思います。次に、総合病院で歯科部門があるような施設を想定します。成書は個人が所有しているので本来は無用でしょう。ただし、手術手技書などは高価でもあり、研修医や若い歯科医師の学習のために所蔵が望まれます（これらは頭頸部領域の書籍として耳鼻咽喉科領域も関係していることが多い）。また、病院によっては唇顎口蓋裂治療など特殊な分野に専門性を有している場合には、もちろんその選択も優先されるべきです。

診療科として「歯科口腔外科」の標榜は自由ですが、羊頭狗肉でなければ病院の歯科口腔外科に勤務している歯科医師は社団法人日本口腔外科学会の会員です。そして、それなりの経歴があれば学会認定の専門医や指導医です（学会会員であることが、専門医、指導医の必要条件ですから）。前述したように学会誌は会員に送付されますので、わざわざ図書館の予算で購入する必要はありません（このことは本邦の学会全般に該当しますので、国内の学会誌をわざわざ図書費で購入するのは大学の図書館くらいでしょう）。では、本院では歯科関係の和雑誌を購入していないのかというと、実はそうでもありません。商業誌を2種（ザ・クインテッセンス、デンタルハイジーン）を定期購読しています。当科に対しては少なからず通常の歯科治療の要望も高く、また、歯科卒後臨床研修指定施設であり、歯科医療全般の情報入手のため「ザ・ク

インテッセンズ」を購入しています。他にも候補はありますが、特別な学術的理由ではなく、図がカラフルであったという程度で選択しました。もう1冊の和雑誌である「デンタルハイジーン」は歯科衛生士対象の雑誌ですが、本院の歯科衛生士のモチベーションをあげるために購入しています。また、近年、入院患者や高齢者の口腔ケアの重要性が認識されるようになりましたが、看護師などの参考にもなると想定しています。

洋書の成書についてはすでに述べましたので割愛します。結局、病院図書館の蔵書としての選択は洋雑誌にほとんど集約されます。ここで小生の経験と第三者の意見として Brandon/Hill のリストから絞った候補は下記のようなものです。

1. Journal of oral and maxillofacial surgery (米国の口腔外科学会誌、Brandon/Hill の選書の1つ)
2. International Journal of oral and maxillofacial surgery (ヨーロッパ系の口腔外科学会誌)
3. Journal of the American Dental Association (米国歯科医師会誌、Brandon/Hill の選書の1つ)
4. Journal of dental research (基礎系、インパクトファクターも歯科関係の中では高い)
5. Oral Surgery, oral medicine, and oral pathology (Brandon/Hill の選書の1つ)

ちなみに、本院では1と2を購入しています。この辺りの雑誌を押さえておけば、口腔外科の潮流を知ることができ、しかもこの2冊には本邦からの投稿もまれではありません。当然、参考文献として引用する頻度も高く、さらに口腔外科症例の論文投稿先の候補になります。ただし、これでは口腔外科に偏りますので、歯科全

体の動向の情報源としての選択や、病院図書館を病診連携登録歯科医師などに開放しているような場合は、2の代わりに3を優先して採用するのもいいと思います(そのほうが費用も安価です)。

VI. 最後に

当科では耳鼻咽喉科などと連携して睡眠時無呼吸の治療を行っています。このように最近では複数の診療科が協力して行う治療が少なくありません。いわゆる学際的とか集学的とかいわれる診療が期待されていますが、それらの書籍の内容は従来の分類法では、どこの書棚におくべきか迷うようなことがあるかもしれません。また、昨今注目されている再生医療のように進歩が著しく、注目を集めている新しい分野もあります。ですから、従来の診療分野にとられない分類を考慮する必要が出てくるかもしれません。同時に書籍の選択には内容の新鮮さを吟味する必要があります。それゆえ選書や図書管理においては利用者と情報交換し、病院の特徴を把握しておくことも大切でしょう。病院図書館が有効に機能して病院のレベルアップに寄与してこそ、本来、病院機能評価で高い評価を得るに値するものと思います。

謝辞

口頭ではなく活字になるがゆえ、慎重になりつつ執筆が遅くなったことを近畿病院図書室協議会の方々にあらためてお詫び申し上げます。また、本記事のために、さまざまな資料を集めていただき助言をいただいた本院図書室司書の武田昭子さんに心より感謝します。稚拙な文章ゆえ十分に意図が表現できてはいないと思いますが、少しでもご理解いただければ幸いです。